

足りるを知るランドスケープポリティクス

The Landscape Politics of Enough

ロビン・M・ルブラン *Robin M. LeBlanc*

米国 ワシントン・アンド・リー大学政治学部

1. 2つの小さなコミュニティ — ボローニャと東京

2016年7月のとある蒸し暑い夜、私はイタリア北部ボローニャにある19世紀に修道院として使われていたプラザ（広場）にいた。私は友人たちと、そこに置かれたピクニックテーブルを囲み、ビールを飲みながら会話に花を咲かせていた。その修道院の建物とプラザは、20世紀には軍の事務所や兵舎として使われていたが、1990年代に入り冷戦が終結を迎えてからは、20年以上に渡り人の手が入ることなく廃墟となっていた。しかし、時が流れ、私たちがそのプラザを訪れた2016年の夏には、かつて兵舎だった建物は、若者のグループに不法占拠され、「ラバス (Làbas)」というコミュニティが築かれていた。ラバスは、2012年の秋からそのスペースを占拠し、20年分の瓦礫やごみを綺麗に片付け、廃屋となっていた建物を改修し、壁の内にも外にも壁画を施した。また、図書館やホームレス支援を目的としたオフィスと宿泊部屋を開設し、オーガニックのピッツェリアやビール醸造所を建てたほか、毎週水曜日にマーケットを開催し、小規模な地元の農家、酪農家、ワイン醸造所オーナーが自ら作った商品を販売できる場を設けた。

この水曜マーケットが、私たちがその晩に集まった目的であった。数百人に上る人々が集まり、野菜、パン、ハーブ、チーズ、ヨーグルトなどを買って求めた。多くの客は、私たちと同じく、手頃な軽食や飲み物を買っては、長テーブルに腰を掛け味わっていた。テーブルが満席になると、あぶれた人たちは地べたに腰を下ろし、小さな円を描いていった。そして、ジャズバンドが演奏する中、就学前や小学生くらいの女の子のグループが、親が立ち話をする横で元気いっぱいに踊る様子も見られた。客層は全体的に若く、中央年齢は恐らく25歳か26歳くらいであろうか。しかし、別の開催日には、私と同年代くらいの中年層のグループや、もう少し年配の60~70代の女性も参加していた。子どもが遊び回り、長テーブルは人々でごった返し、出店ブースでは出店者と客のやり取りが繰り返され、それはその場にいるさまざまなグループのメンバーの枠を超えた社会的な交流を促していた。また、販売されている商品の種類や、飲食物のとてもシンプ

ルな提供方法は、ビールの使い捨てコップを除いて、ごみの量を最小限に抑えていた。それでも出たごみは、わかりやすく表示されたリサイクル用ごみ箱で回収されていた。

ラバスの若き創設者たちは、そのスペースは彼らが頭の中で描いていたアイデアをコミュニティのために実行に移す機会を与えてくれたのだ、とインタビューで話してくれた。例えば、経済的に疎外されてきた人々の正義の復活や、ピッツェリアやビール醸造所でのエシカル・コマースといったアイデアだ。また、水曜日のファーマーズ・マーケットは、「0km」ルール（地元でとれたもののみを販売）に則っており、その出店者たちは環境に優しい農業を継続していくには、水曜マーケットのようなスペースが不可欠であると熱心に語り、客の多くはマーケットに足を運ぶ理由を、値段が手頃で、友人と集まるにうってつけのリラックスできる場所であるからと述べた。近隣に住む中年層の女性曰く、ラバスが改修した軍事基地は、あらゆる人々が集まることのできる稀有な場所となっているようだ。また、ラバスでは多種多様なイベントが開催されており、私も、ある晩にはラバスの住民であるアーティストのプレゼンテーションに参加し、また別の晩には、欧州連合の対外国境で深刻化する難民危機をテーマに、著名なNGO団体リーダーたちが繰り広げる討論に耳を傾けていた。

それから一年と少しの月日が流れ、11月のじめじめしたとある夜、私は東京郊外にある笑恵館にて、また別の長テーブルを囲み夕食会に興じていた。この夕食会には、古くからの友人に招待された。彼女は70歳をかなり過ぎていたが、笑恵館は彼女が30年以上住んできた自宅周辺で、最近の行きつけとなった場所だった。笑恵館は、仮設のコミュニティセンターのようなもので、大きめの一戸建て住宅と、1970年代に建てられた1DKのアパートから成る物件である。現在は、60代後半の女性が両親からこの物件を相続し、その所有者となっている。彼女は、相続後に内装の一部にリノベーションを施し、庭の大部分を覆うようにデッキを設置し、そしてほぼ毎日施設を一般に開放している。これは、子どものいない彼女にとっての遺産を後世に残す手段である。彼女は一戸建て住宅の二階の一室を居住スペースとしており、他の部屋の殆どは笑恵館の公共空間として開放されている¹⁾。

その11月中旬の夕食会には、30代半ばから80代半ばま

での幅広い年代の男女が参加しており、賑やかな夕べとなった。私たち参加者は500円を支払い、シンプルではあるが量はたっぷりの食事と、お茶やビールを何杯も楽しんだ。参加者の中には、笑恵館のリノベーションに携わった中年層の建築士や、笑恵館のアパートに住む30代の男性もおり、医療従事者である彼は患者治療に笑いを取り入れる方法の模索に奮闘していた。また別の参加者、中年層の女性実業家は、東京都内でも離れた地域に住んでおり、公共交通機関で一時間近くかけて、夕食会に参加していると話してくれた。彼女は両親の死によって、一人で年を重ねるにつれ支えになってくれるコミュニティを探す必要があると気づき、それが笑恵館の夕食会に参加するきっかけとなったそうだ。そして、80代の女性参加者は、ハーブティービジネスを新しく始めたそうで、サンプルのティーバッグを手渡してくれた。今どきの流行風の透明のティーバックには、茶葉や花が美しくパッケージされていた。

東京の狭く混み合った空間では驚くに当たらないが、笑恵館には、ポローニャのラバスにあったような数百人規模の人が集まれる場所はない。しかし、規模は違えど、笑恵館もラバスと同じように、多岐に渡る機能を果たしている。一戸建て住宅の一階には、小さな業務用の調理場が設置されており、若い男性がパン屋を経営している。他にも、セレクトショップ、高齢者のためのデイケアサービス、母親が小さな子どもを連れて来れる遊び場、誰もが自由にくつろげるデッキスペースなどがある。また、500円の入会時登録料を支払えば、誰でも笑恵館の会員になることができ、低価格な夕食会や、ウクレレ教室、フィットネス教室といったさまざまな教育イベントを企画運営する交流サークルにも参加できる。笑恵館の会員は、アパートを居住利用することや、イベント開催やプロジェクトの作業所としてスペースをレンタル利用できるほか、自身の運営する団体やビジネスの住所登録に、笑恵館の住所利用も可能である。夕食会とは別の日に笑恵館を訪れた際は、大学生と年金生活を送る高齢者の方たちが、最近行ったキューバ旅行の写真スライドを見ながら、思い出話に花を咲かせていた。私たちは、南米料理をつまみながら、アメリカの外交政策について議論し、文化の違いについて笑いあった。

2. 脱成長とコミュニティ民主主義

今日、私たちは人類が作り出した地球温暖化に直面している。それは、2018年に公表された国連気候変動に関する政府間パネル特別報告書「1.5°Cの地球温暖化」にて、人類に壊滅的な影響を与え得ると表現されている²⁾。この報告書の執筆に携わった専門家たちは、私たち人類の行動変容により、今後20年間における平均気温の急激な上昇を抑制し、破滅的な影響を回避することは理論的には可能であるとしているが、その一方で、その取り組みに政治的にコミットすることができるか否かについては疑念を呈している³⁾。近年、「脱成長 (degrowth)」の研究が多く進んでおり、それは環境負荷

への懸念から、戦後に構築された恒久的経済成長のモデルを意図的に拒絶し、社会の豊かさに重点を置くものである。こうした研究は、私たちが今必要とされる新しいポリティクスへと転換して行く手段を模索するに当たり、重要な役割を担う⁴⁾。とりわけ、私たちは深刻な汚染問題を作り出している富裕国が変わることが重要であることもまた十分に認識している。

脱成長のポリティクスの理解に資するため、私はこの10年間、日本とイタリアにて民主主義に基づいたコミュニティはどのように深く縮小していくことができるのかについて、さまざまなアイデアを模索してきた。両国とも、戦後の急速な経済成長がファシズムから民主政治への移行を支えた、言わば成功例と言えるだろう。現在、両国では人口減少と急速な高齢化が進んでおり、ここ20年間以上に渡り経済は停滞している⁵⁾。このため、両国は脱成長の状況下で、民主主義コミュニティは繁栄することができるか否か立証する役割を、半ば強制的に担うこととなった。そこで私は、高度成長期に大きく発展した東京とポローニャの街で、18か月以上に渡る参与観察調査とインタビューを実施し、行政関係者や建築士、ホームレスの支援者、若い活動家、町内会長、住宅開発業者といったステークホルダーが、次々と現れる問題にどのように対処しようと思いついているのか検証を行った。

人口減少と高齢化が進む中での日常は、憂鬱なものであることが多い。産業経済からサービス経済への移行や縮退時代には避けて通ることのできない仕事の再編により、社会の不均衡は拡大の一途を辿ってきた。若者たちは、先の両親世代の豊かさに追い付こうと奮闘している⁷⁾。手頃な価格の住宅が不足し、住宅危機が深刻化する一方で、かつて活気に溢れたコミュニティでは空間や建物が廃屋となり放置されている⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾。インタビューに協力頂いた公務員の方たちは、社会的孤立の拡大に対処するための予算や法的手段が不足していることを悲嘆していた。しかしながら、前述したように、ポローニャや東京で目にしたコミュニティ・モデルには、憂鬱と言うべき所は何一つなかった。

笑恵館とラバスは、縮退の道を進むコミュニティが直面するさまざまな問題に取り組み、使い物にならないと思われた物件に、再び活気を呼び戻してきた。まず、仕事のなかった若者が、環境に優しく目新しいビジネスに試験的に挑戦できる場所を開き、住む場所がなくて困っていた人々に、手頃な価格の住居を提供した。また、コミュニティとして、ヨガのレッスンから子ども向けのアート・プロジェクト、地球規模の課題や地元の政治的懸念事項に関する講演といった幅広い教育プログラムに従事した。どちらの地域でも緑地が充分になく、街に出かけるには金銭的負担が大きいため、笑恵館とラバス共に孤独な老若男女がいつでも無料で利用できるアウトドアスペースを提供していた。より広く言えば、こうしたコミュニティは、脱成長を目指すポリティクスへの理解を深める機会を提供していたということになる。というのも、「今より豊かだった」昔の残りものを別の用途に再利用しながら、シンプルに暮らすという選択肢は、称賛に値するだけでなく、自己持続的で、更には喜びにつながるもので

あるということを、数多くの方法で実証しているのである。

とはいえ、ラバスと笑恵館が唯一無二の存在ということではない。東京においても、ポローニャにおいても、ラバスや笑恵館との共通点を有しつつ、成長に依存した文化が残したランドスケープの中で、小規模ながらも、新しい物的、社会的、経済的、時には政治的なスペースの創出に取り組もうとするコミュニティは他にも存在していた。そうしたスペースは、主要な都市計画戦略の中核となるものでなければ、ポローニャの目指すハイテクな新しい工業地帯でもなく、東京で開催される二回目のオリンピックのように喝采を浴びることもない¹²⁾¹³⁾。ラバスと笑恵館は、建築雑誌にあるような輝かしい未来コミュニティのイメージとはかけ離れている。この二つのコミュニティが成し遂げてきたものは、この二つの街で取り組むべき事項を考えると、ほんの微々たるものなのである。

行政関係者の反応からも、こうした取り組みがどれほど軽視されているかということが明らかとなった。私を笑恵館に招待してくれた友人は、彼女の暮らす区内で長く活動を続けてきた草の根環境保護活動家であるが、笑恵館に取り組むようなプロジェクトの類は、地方自治体から注目や資金を集めるのに失敗に終わることが多く、絶えず闘い続けなければならないと不満を漏らしていた。彼女は近隣の住民たちと協力して、高齢者所有の空き家について草の根レベルでアンケート調査を実施したが、行政関係者からは大した反応を得ることが出来なかった、とも話してくれた。また、彼女は生活に困っている若い世帯を支援し、世代を超えて人々がつながりを構築できるように、自宅の一部を「子ども食堂」へと改修した。その子ども食堂では、月に一回、子どもには無料で、親には300円という価格で食事を提供している。参加者の人数が増え、彼女の家のスペースでは追い付かなくなってきたから、ボランティアの方たちと、区有物件にスペースを借りて活動を続けてきたが、今ではその施設でも追い付かなくなっている。しかし、周りに空き家が数多くあるにも関わらず、活動の拡大に利用できないのである。近隣の区職員がインタビューで語ってくれたのは、日本の地方自治体には、増加し続ける空き家対策に向けた法的枠組みがほとんどないという現状であった。

東京で、こうした見て見ぬふりが住民の取り組みを妨げているとすれば、イタリアでは、ラバスのようなコミュニティの試験的取り組みに対し、政府の反対が脅威となっていると言える。私がラバスを訪れてから一年が過ぎた2017年のこと、警官隊がラバスのコミュニティを武力行使で強制退去に追いやった。ポローニャ市は、包括的な都市再生計画のための資金不足に陥り、ラバスのあった不動産物件を民間の土地開発業者に売却する決議を採択し、アパートやホテルの建設を行うことにしたのである。しかし、ラバスのリーダーたちの抵抗運動は広く支援を集め、2万人に上る住民が参加する平和パレードとなり、最終的には市政府がラバスのコミュニティの代わりとなるスペースの利用許可を与えるに至った¹⁴⁾。2018年の夏までに、水曜マーケットは昔のように開催されるようになっていたが、その一方で、市が管轄する物件での

ピッツェリアやビール醸造所の経営は禁止されることとなった。昔と比べて、マーケットで長々と会話を楽しむ住民の人数は減り、多様性も減少していた。

両都市において、地域の政治指導者たちは市民の関わりを期待しているにも関わらず、笑恵館やラバスのようなプロジェクトに対しては無関心であり、更には反対しており、私はその矛盾とも言える乖離に衝撃を受けた。2013年に、ポローニャ市の都市開発担当職員が私に言ったのは、市民はいつまでも豊かさが増え続けるという時代は終わったことを理解し、自身の運命により大きな責任を持ち、自分たちで助け合うセルフヘルプのコミュニティを構築する必要があることを認識しなくてはならないという内容だった。2014年に、戦後の高度成長期にポローニャ市の建築士として一線で活躍していた男性が語ってくれたのは、イタリアでは何万という住宅危機が記録されているが、これ以上住宅を建設すべきではないとのことだった。イタリアには全人口に対応するに十分な数の居住スペースがすでに存在しており、問題はその分配なのである。その夏にインタビューした不動産市場アナリストも、ポローニャの最大の問題は、中所得・低所得層の住民のニーズに応えるために、空き家となっている公共スペースを活用しようとする政治的意思が欠如している点であると述べた。

3. 「清貧の美学」に基づく政治的コンセンサス

2010年のことだが、東京23区のうち西部に位置する区の職員は、高齢化が進み、高齢者の孤立の可能性が増加する中、住民が互いに助け合う新しく金銭的負荷の少ない方策を住民自らが見出さなくてはならないと語った。2014年には、別の職員は、彼の区では、空き家の数が増え続けており、その一方で、公営住宅などの住宅補助の受給資格があるにも関わらず、十分な補助を受給できていない住民のリストは長くなる一方だという矛盾に悩まされていると話してくれた。また、その夏には、東京の建築士の男性にインタビューする機会もあった。彼は、日本はどのようにしたら環境の限界に向き合いながら、停滞する経済で仕事を得ることのできない若者世代を巻き込むことができるのかという問題に関心を寄せており、彼によれば、日本にとっての最大の課題は、創造力に富んだ政策立案を支える政治的なコンセンサスを構築できるか否かということだった。

笑恵館やラバスのような手作りのコミュニティは、都市計画の立案者たちが懸念する問題の一部に対して、クリエイティブで安価な対策を体現していると言える。しかし、立案者たちはこうしたプロジェクトをあからさまに敵視するわけではないものの、問題解決に中心的な役割を担うとは見なしていない。脱成長の取り組みを実施するコミュニティとして、笑恵館やラバスは規模が小さく、立場も弱く不安定で、そして間違いなく、不効率で特異な人の相関関係によって苦難の道を強いられていると言えるだろう。しかし、こうした取り組みの規模の小ささの中にこそ、日本語で「清貧」として知

られる美学、つまり「余計なものがない」美しさがあり、それは最もスマートと言われ、環境に配慮した新しいプロジェクトでは、釣り合うことのできない特徴であり、それ故に注目に値するのである。更に、その弱さには、笑恵館やラバスのようなコミュニティの行く先が、清貧の美学にコミットする政治的コンセンサスの醸成にかかっているという点が深く関係している。こうした小さな手作りのコミュニティは、人々を物的側面で満足させることができなければ、崩壊に陥ると言えよう。というのも、こうした脱成長型のコミュニティは、参加者の意見を最低限反映せざるを得ないのであって、それはかつて松下圭一が唱えた民主主義政治における参加型の「シビル・ミニマム」と言える¹⁵⁾。よって、国連の気候変動に関する報告書が、人類の未来に不可欠とするタイプの政治的転換を追求することになるのである。

4. 足るを知るランドスケープ ポリティクスへ

1990年代初めの秋、私はフルブライト奨学金を受けて東京に留学していた。園芸家である私の母がアメリカから遊びに来たので、京都の有名な龍安寺の石庭(方丈庭園)に連れて行った。石庭は素晴らしいものであったが、それよりも思い出に残っているのは、茶室を挟んで反対にある知足の蹲踞(つくばい)の傍にしゃがんで、その手水鉢の「口」の水穴を取り囲む文字を眺めていたことである。「唯足知(ただ足るを知る)」は何とか読解できたものの、その順番が間違っており、また、「吾(われ)」を「悟(さとり)」と読み間違えたため、誤って「唯足知悟(ただ足るを知るは悟りをひらくこと)」と訳してしまった。

私が脱成長に向けた計画戦略で重要視すべきと考えるのは、龍安寺の蹲踞に刻まれた言葉を読み間違えたときのようなある種の不完全な理解なのかもしれない。私たち一人一人は、星の数ほどの小さな選択を行っており、それが地球を破壊の道に追いやり、私たちのコミュニティでおどましい不正義を生み出しているということは十分に諒解している。それにも関わらず、地球規模の気象危機について考察する際、私たちはそれに対応する大規模な対策を講じなければならないと考えがちである。私たちは、自らの居住スペースを見直し作り変えるに際し、あまりにも壮大な計画に気を取られすぎなのである。私たちが直面する課題に取り組むには、公共交通機関網や再生エネルギーの生成といった大規模なプロジェクトが必要なことは言うまでもない。しかし、例えば、空き家などの放棄されたスペースを、物理的にも、法的にも開放できるよう取り組んではどうだろうか。そこでは、住民が残されたものを活用せざるを得ない、或いは活用することを許可されるべきである。こうしたアプローチが成功裏に終わるか否かは、地域コミュニティが、共通して、「質素であることに誇りをもつ美学」への政治的コミットメントを醸成できるかどうかにかかっている。しかし、こうした政治的変革は、私たちの前に立ちほだかる問題を乗り越えるには須要ではな

いだろうか。小規模で、弱く不安定で、見た目にはパツとしないが、充足感があるスペースは、私たちの周りにすでに存在しているわけであって、後はそこに公共的な価値を見出すだけなのである。つまり、私たち人類に必要なのは、足るを知るランドスケープポリティクスなのである。

謝辞

本研究は総合地球環境学研究所 FEAST の助成(14200116)を受けた。日本とイタリアの現地調査の一分はNortheast Asia Council of the Association for Asian StudiesとU.S.-Italy Fulbright Commissionの助成を受けた。記して謝意を表したい。

補註および引用文献

- 1) 笑恵館：笑恵館とは(はじめの思い)
<<http://shokeikan.com/about>> 2014.3更新, 2019.1.27参照
- 2) Intergovernmental Panel on Climate Change (2018): Global Warming of 1.5°C
<https://report.ipcc.ch/sr15/pdf/sr15_spm_final.pdf> 2019.1.9参照
- 3) Davenport, Coral: "Major Climate Report Describes a Strong Risk of Crisis as Early as 2040." The New York Times <<https://nyti.ms/2Cw5MF8>> 2018.10.7更新, 2019.1.9参照
- 4) D'Alisa, Giacomo, Federico Demaria, and Giorgos Kallis (2015): Degrowth: A Vocabulary for a New Era: Routledge, 220 pp
- 5) Istituto Nazionale di Statistica
<<https://www.istat.it/it/>> 2019.1.27参照
- 6) 総務省統計局: 統計局ホームページ/人口推計(平成30年(2018年)8月確定値, 平成31年(2019年)1月概算値)
<<https://www.stat.go.jp/data/jinsui/new.html>> 2019.1.21更新, 2019.1.27参照
- 7) Mania, Roberto (2012): "Giovanni Disoccupati, Record Da 20 Anni Pesa Anche La Riforme Delle Pensioni": La Repubblica, 9. 1, 4
- 8) 三浦展(2013): データでわかる2030年の日本: 洋泉社, 205 pp
- 9) Virgilio, Giovanni (2012): Le Nuove Forme Del Disagio Abitativo Tra Crisi e Inefficacia Dell'intervento Pubblico: Archivio Di Studi Urbani e Regionali 105, 102-12
- 10) 野沢哲也: 東京そこにある古い: 大団地30年後の湾岸映す: 朝日新聞2014.8.8, 1
- 11) 東京都: 空き家の現状と取組
<http://www.toshiseibi.metro.tokyo.jp/juutaku_kcs/pdf/h27_05/shiryo_27_05_08.pdf> 2015.5.8更新, 2018.1.21参照
- 12) Comune di Bologna (2009): Bologna: Leggere Il Nuovo Piano Urbanistico, PSC+RUE+POC: SATE Industria Grafica, 119 pp
- 13) 野村総合研究所(2014): 東京・首都圏はこう変わる! 未来計画2020: 日本経済新聞出版社, 112 pp
- 14) "Bologna, sgombero Låbas, il sindaco. 'Decisione dei pm. Ora nuova sede'": il Resto del Carlino.
<<https://www.ilrestodelcarlino.it/bologna/cronaca/lab-as-sgombero-1.3320329>> 2017.8.8更新, 2018.7.2参照
- 15) 松下圭一(1971): シビル・ミニマムの思想: 東京大学出版会, 400 pp